

(別紙2-1)《議員用》

2020年 2月10日

狭山市議会議長

加賀谷 勉 様

研修議員氏名 高橋ブラクソン久美子

研 修 会 報 告 書

このことについて、次のとおり報告します。

1 期 間 2020年1月25日～ 2020年1月26日 (泊 日)

2 研 修 会 名

第13回全国校区・小地域福祉活動サミット IN さやま

3 研 修 会 主 催 者

第13回全国校区・小地域福祉活動サミット IN さやま 実行委員会

社会福祉法人 狭山市社会福祉協議会

4 開 催 場 所

狭山市市民会館 狭山市市民交流センター

5 研 修 会 スケジュール

別紙のとおり



6 研修会概要



そもそもこのサミットは次のような目的を持って行われた。

「全国の地域福祉活動者による実践紹介や参加者同士の交流を目的として開催し、小地域福祉活動のより一層の充実を目指すもの」。

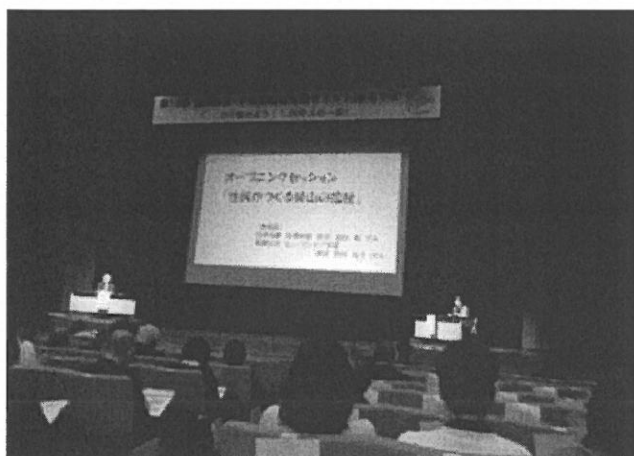
この目的の通り、北は北海道、南は沖縄までの地域福祉を担っている人が集り、

交流し、学び、元気を貰った会議となった。

実行委員会は狭山市社会福祉協議会を中心に多くの民間福祉団体の方々が集まり組織された。このサミットをする以前にいくつかのサミットに参加し、「このようなものであったら狭山市でも開催することは出来る」と考えた方々の蛮勇（！？）は凄いと思う。このサミットに参加してみて、狭山市には多くのボランティアや有償ボランティアグループがさまざまな活動をしている事に改めて認識を深めた。それがなければ、こんなに大きな会議は開くことは出来なかったであろう。

狭山市民も多く参加したが、それにしても全国から集った1200人規模のサミットを成功させたことは素晴らしい事だと思う。残念ながら、ホテルなどが少ない。しかし、狭山市駅周辺には会議を持てる多くの施設があることに誇りを感じず。実行委員会に関わった人のご努力に心から敬意を示したいと思った。

それにしても、議長が開会式で紹介されたが、ご挨拶を述べられた。しかし、議会からこのサミットへの参加が私と加賀谷議長のみであった。文教厚生委員会の議員にはご招待は来ていなかったのだろうか。参加費を払ってでも多くの議員が参加し、サミットを盛り上げ、また、この会議からの恩恵を受けるべきではなかったかと思った。素晴らしい会議だっただけに、議会の、議員の関わりがあまりにも少なかった事を寂しく思った。



オープニングセッション 「住民がつくる狭山の福祉」

登壇者

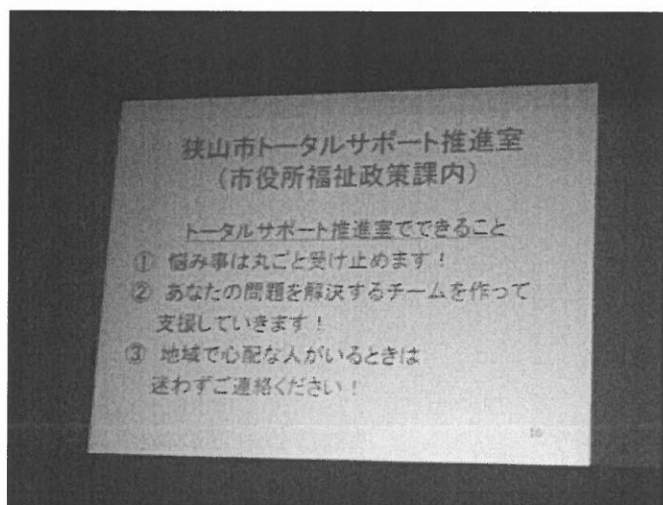
日本大学 文理学部 教授 諏訪徹

東都大学 ヒューマンケア学部 野村

政子

まずは、狭山市の福祉の変遷について 1980年ごろからボランティア活動が盛んになり、2000年に福祉公社の設立とおなじくして、市民活動リーダーの活動がみられるようになった。この活動を支える福祉の人材発掘のために元気大学等も設立された。

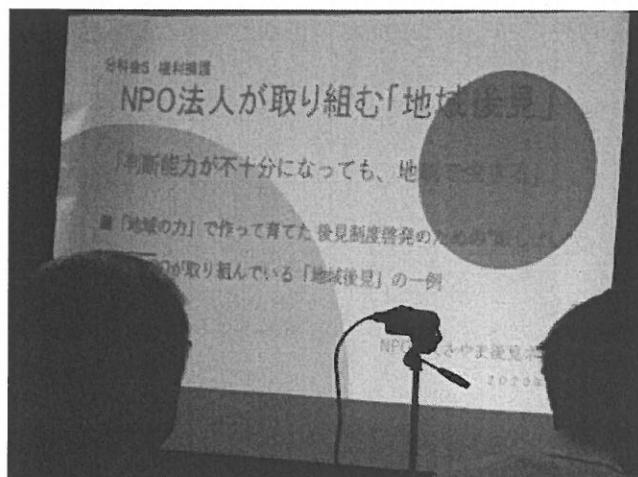
2009年の第2次地域福祉計画により、さらに地域活動が充実し、サロン事業などが多く立ち上がった。2014年には第3次地域福祉計画により、有償サービスなどの事業も加わった。ボランティア活動推進の検討会議が設置された。2015年 地域福祉推進市民会議の設置。2016年 生活支援体制整備事業着手、社協を中心に一層の協議会の設立。2017年 第二層の協議会の勉強会 2018年第二層の協議会が地域に立ち上がる。これまでに、社協登録サロンは49団体、支部社協運営サロンは3団体に増えた。



狭山市は、地域福祉推進市民会議を社協に設置し、提言を行い、地域福祉活動の研究を行ってきた。今後は第一層、第二層の協議体が地域の福祉の推進を行っていく。第二層の協議体はそれぞれの地域の特性を考え、10の地域でさまざまな活動を開始し始めている。狭山市地域福祉推進市民会議の提言を受けた中で、狭山市はトータルサポート推進室を設置した。「問題が複雑で相談窓口がわからない」という人からの相談に応じ、課題を

整理して必要な相談窓口につなげる。相談者に寄り添う窓口になっている。相談案件は年々増している。

分科会5 「地域で生きる～もう一度笑顔になりたい～」



1. 報告 NPO法人さやま後見ネット(埼玉県狭山市) 的場豊 梅沢佳子

NPO法人さやま後見ネットとは 2013年に創立。目的は「すべての人が健やかに安心して暮らすことの出来る地域社会の実現に寄与する事」。

活動内容は 啓発活動、後見申し立て支援、

相談業務、受任。

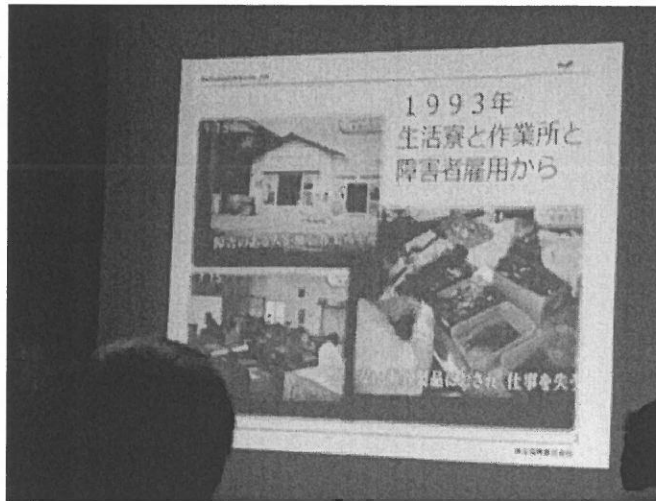
「地域後見」の1例：知的障がい者を持つ高齢の父親からの相談。後見人制度を利用したの地域による支えあい「地域後見」の実現。さまざまな選択肢の中から、この事例に最適な支援方法を考える。その結果、地域の人的な支援も含め、親子の同居、自分らしい生活の維持に努めている。

地域のその人に即した「地域後見」を実現するためには、地域とのつながりを出来るだけ維持するという視点を重視し、地域包括支援センターや市民地域後見 NPO 法人との連携を強化し、チームによる支え合い活動が必要である。関係者が契約締結可能な状況の内に柔軟に支援に対応するべきである。

「地域後見制度」は地域での生活を維持する支援となればよい。

2. 報告 埼玉福興株式会社 荒井利昌

ソーシャルファームは、「ソーシャルエンタープライズ」の一種であり、障がい者あるいは労働市場で不利な立場にある人々のために、仕事を生み出し、また支援付き雇用の機会を提供することに焦点をおいたビジネスである。」



この概念で、埼玉福興株式会社を作った。ミッションは、福祉の想像「家族と言う形・労働力の主力となって働く」をテーマに障がい者等がさまざまな形で社会的に自立できるような環境を創出し、共に人生を歩む環境とシステムを創造する事を目的とする。初めは障がい者の作業所を作っていたが、仕事がなくなったりして、現在では農場（ソーシャルファーム）を運営している。

ここは生活寮「年代寮」を併設し、18歳から75歳までの28人が生活している。ソーシャルファームと一緒に働く方針である。

埼玉農場では多くの方々の支援の下、水耕栽培600坪、野菜苗・花などを500坪、オリーブ2Ha等を生産している。仕事は1人でするとき、ペアでするとき、チームでするときがあり、個人の能力に合わせて仕事をしている。皆が同じようには働けない。

このソーシャルファームに関しては、特例子会社に対してと同じような批判がある。まずは、障がい者を労働力として囲い込んでいるという事である。通常の企業で、支援を受けながら障がい者も健常者と共に働くというのではなく、健常者の指導の下、障が

い者だけその中で働くのだ。現代の日本において、障がい者が一般社会と切り離されており、障がい者が一般社会に参加する事が難しいという、また障害者をどう扱って良いか分からないために、ソーシャルファームや特例子会社で労働させるという事になってしまう。この事業形態は本来あるべき共生社会型労働ではなく、従来からある一般社会から分離した形での障がい者労働の形態である。

また、この福興会社は生活寮を持っているが、仕事と労働が一体化してよいとも考えられるかもしれないが、逆に障がいのある労働者を生活寮に囲い込んでいるとも考えられる。28人が住んでいて、一人が脱走したというが、本当に生活寮の住人が農業を好きでなければ、とても居られないだろう。

障がい者の自立が叫ばれ、障がい者の労働が強調されるようになったのは、人口減少、単純労働力雇用が難しくなったことに起因するのではないか。障がい者も働き、自立できることは好ましいが、これを標榜しながら国からの補助金等をもらい、障がい者の賃金を引き下げ（就労B）、障がい者を利用しようとする輩がいる事も事実である。

だからだろうか、福祉と農業のコラボ、人に合わせて仕事をつくる、誰も切り捨てないソーシャルインクルージョンの世界を実現するという社長の言葉を空々しく聴いてしまうところがある。健常者が儲けられない仕組みの中で障がい者等が働いて儲けられる会社になるのか。どこか、何かに引っかかるものを感じてしまう。

3. 若年性認知症の当事者及び本人を支援する方々 報告：猪鼻秀俊 猪鼻伸代

猪鼻さんが若年性認知症ではないかと会社の上司が気付いた。取扱説明書などが理解できない、報告書等が書けない、彼が59歳の時だった。病気を告げられた時は信じられなかった。辛かった。仕事が今までのように出来なく、運転も不可能になった。しかし、理解のある会社で、本社に異動し、総務課で出来る仕事をした。

現在では、けやきの家（金曜日）、子ども食堂の手伝いをしたり、認知症デイサービスに通ったりしている。オカリナが好きでバンド活動をするのが楽しみである。

妻の伸代さんは、夫の考えの先回りをしない。彼は自分でしたいので、後から手助けをするようにしているとのこと。オレンジカフェなどに参加し、同じ境遇の方々と知り合い、仲間が見つかったことはとても救いになった。

市長には若年性認知症のような人々の集う場所をふやしてほしい。

猪鼻さんとお友達の作る「これでいいのだ バンド」が演奏した。このバンドについては、HPから引用したい。

2018年9月、若年性認知症の当事者である猪鼻秀俊氏と、(一社)埼玉県作業療法士会の会員で構成されていた寄居音楽隊が出会い結成されたバンド。2018年9月23日、埼玉県庁前

で開催された RUN 伴埼玉のゴールイベントでデビュー(当時のバンド名はイベント運営者が命名したオレンジキッズ)。

2018年12月、文京学院大学ふじみ野キャンパスにて作業療法学科の講義に猪鼻夫妻が講師として招かれた際にも同行し、学生、教員の前で演奏を披露した。その講義の中で、猪鼻秀俊氏の妻である猪鼻伸代氏が、タモリが赤塚不二夫へ送った弔辞を聞いて勇気をもらったと語った。“あなたの考えはすべての出来事、存在をあるがままに前向きに肯定し、受け入れることです。それによって人間は、重苦しい意味の世界から解放され、軽やかになり、また、時間は前後関係を断ち放たれて、その時、その場が異様に明るく感じられます。この考えをあなたは見事に一言で言い表しています。すなわち、「これでいいのだ」と”

「病気になったからって無理をする必要はないんだなって、これでいいのだからって素敵な言葉になって、この言葉を聞いてすごく気持ちが楽になったんです」この講義に感銘を受けた作業療法士からの提案で、バンド名を「これでいいのだバンド」と改名した。

2019年10月現在、メンバーは21名。小学生、レクワーカー、若年性認知症支援コーディネーター、認知症の人と家族の会世話人、当事者、介護家族、作業療法士、その担当患者など、様々な人間が、年齢、性別、職業、肩書、健康状態に関係なく、良い加減に、あるがまま、かつ真摯に音楽を楽しんでいる。2019年5月より、月1回の定期練習を開始。会場は国立障害者リハビリテーションセンター。(一社)埼玉県作業療法士会、(公社)認知症の人と家族の会埼玉支部公認。

すべてを「これでいいのだ」と受け止めるのは難しい。しかし、病気になったからと言ってすべてを失ったわけでもない。時間を掛けてよくなるもの、原因がわからない病気もある。そんな時、訳も分からない、希望とも呼べない楽観に心を委ねても良いと思う。病気になる事が不幸なのではなく、不幸に身をゆだねることが不幸なのだろうから、「これでいいのだ」を思えるようになりたい。出来るかどうかは、自分しだいはあるが。

2日目

全体会2 さやまサミット本音でトーク 「地域福祉活動者1000人の次の一步を考えよう」

1. 報告者 渡辺彰浩 (新座市北部第2地区地域福祉推進協議会)

まず、若い報告者がなぜ自分が福祉に携わるようになったかを語った。中学生の頃、生徒会活動をきっかけに北2福進協と出会い、楽しい活動に思った。高校生になっても参加し、大学は福祉系に進み、現在では他市の社会福祉協議会の職員をしている。楽しい思いながら活動した内容とは、廃校になった旧新座小学校跡地で地域福祉住民プロジ

エクトを立ち上げ、地域福祉活動計画作業部会に参画したことや、地域福祉活動計画及び北部第2地区活動計画を策定したことでもあった。また、成果として北部第2地区地域福祉推進協議会も2007年に設立した。

現在では、さまざまな活動をコミュニティコーディネーター兼コミュニティワーカーが加わって活動をしている。また、多くのプロジェクトを分担しながら行っている。

ここで、私が感動したのは、報告者（若者、始めた時は15歳）が福祉に関わる活動を楽しく行えたという点である。義務でもなく、自分の名誉や利益のためでなく、若く純粋に活動を楽しんだという事である。学校の他にも自分の楽しめる場所があるのに気付いた。そして、その気持ちが持続して、現在では自分の職とした。若い人がワクワク楽しめる福祉活動って素晴らしいと思った。仕掛けを知りたい。

2. 報告者 田辺起夫 狭山台ノルディック・ウォーキング

田辺さんがノルディック・ウォーキングを始めたのは、妻が変形性膝関節症を患い、山登りができなくなったことである。また、自分も右股関節の痺れが出た事による。それで、ノルディック・ウォーキングを始めた。妻はウォーキングを始めて1年後には山登りを再開、ご自分もウォーキングと正しい姿勢のストレッチで身体は良好である。

ノルディックの会を始めたのは一人では改善活動が継続されず、一人ひとりの状況のちがいもあり、メンタル面でも1人では不安であるという事。

歩くという事以外に自立体力測定や個人メニューの提言、他にイベントや会員の交流などを行っている。今後は生活支援体制整備2層営らにノルディック・ウォーク公認指導員を育成したい。

私は田辺さんが傾聴ボランティアグループ活動をしているのを知っている。地方で単身赴任をしていて、狭山市には何の根も持たなかったとおっしゃっていた田辺さんのご活躍は素晴らしい。健康づくりや心のケアのために、自分だけでなく多くの人に関わり、会を作って発展させているのには感心する。

3. 報告者 安永康枝 みんなの食堂さといも、フードバンクさやま

子ども食堂のつもりで始めたのは2016年8月から。「おにぎりをつくろうよ」と大人100円以上、子ども0円で始めたが、子どもは来なかった。次第に「野菜を食べよう」というコンセプトに変わった。その内に、フードバンクから食材が来るようになってメニューが増えた。食材をもって、「ほんきっこ」や「祭り」にも参加するようになった。いまや、みんなの食堂だけでなく、子供用品のミニバザーなどにも活動が増えている。「かさ地蔵プロジェクト」ではフードバンクの食料を年2回必要な人に送っている。

この方も昔から知っている人の1人。いろんなところで活動している。私は国際交流協会で長年ご一緒しているが、本当に活動が多岐にわたり、また決してギブアップせずに、地道に続けているというのが素晴らしい。彼女のコンセプトが周りの人に理解されていくのが私にも嬉しい。

報告者 勝部麗子 豊中市社会福祉協議会 福祉推進室長

「豊中市社会福祉協議会のCSW(コミュニティソーシャルワーカー)と生活困窮者自立支援取り組み 地域共生社会への新たなステージ」

「1人も取りこぼさない」が合言葉。排除から包摂へ。させられた人が支える人に。すべての人に居場所と役割りを。断らない福祉。多機能協働。社会的孤立への対応。等に心がけている。個の課題から地域づくりを考える。例えばゴミ屋敷、引きこもり、8050、アルコール依存・刑余者、社会的孤立。

CSWは相談者を問題解決に結びつけるのが仕事であり、各機関への取次ぎだけでなく相談者へ寄り添わなければならない。問題は相談しない、出来ない、孤立している人にどうアプローチするかである。本当に困っている人がなかなか福祉の制度に結びつかないのが現状である。

見守り、声掛け活動、個別支援が必要である。しかし、制度が確立されるに従い、楽しい場所が変質する。役所的になって、画一化する。豊中市では校区福祉委員会活動が盛んで、福祉なんでも相談窓口が小学校区ごとに設置されている。

「すべての人に居場所と役割りを」

宅地の無償貸与→都市型農園豊中あぐり

内職広場、道端の駅(高齢者の手作り品の常設販売スペース)

子どもの居場所作り

福祉便利や事業住民主体の運営委員会

くるくるパントリー 福祉便利や(200円/15分)

引きこもりの就労支援プログラム:豊中の一びの一びプロジェクト

勝部さんは福祉の中ではカリスマ職員といわれる方。豊富な経験により、多くのプロジェクトや仕掛けをしながら地域福祉を構築してきた。身を粉にして働いた成果が上がって、「すべての人に居場所と役割り」というテーマが豊中市では進んでいる。立派だなあ。ゴミ屋敷の解消と言うのが始まりだったと思うが、その課題を多くの人々の問題解決に結びつけた。その際、ゴミ屋敷で提示された課題は、ゴミを積み上げる人に対する問題であり、如何にそこに福祉が関わるかが大切で、ゴミを片付ける事だけが問題ではないと明言された。

報告の後、報告者と助言者を交え、シンポジウムがもたれた。そこで出された事をらるると:

- ◎いろいろな人の助けを求める。夢に協力してくれる人など、様ざまなかかわりができる。
- ◎自立とは人とつなげる事→助けてという人を増やす。
- ◎ワクワクする事に人が集る。自分達で決め、自分達のアイデアで薦める。楽しく。
- ◎初めからスキームをつくらない。先回りしない。
- ◎ボランティア：誰でも出来る事を社会化する。
- ◎社協・制度にするとやらされた感があり、仕様書などを作ると義務化されるようだ。
- ◎話し合える場所を持たなければならない。課題をしり、それに対して優しくなれる。つながれない人をどうするのか、新たな繋がり方を取り入れる。自治会だけで繋がれない。多くの場が必要である。

まとめトーク

登壇者 牧里毎治 関西学院大学 小地域福祉活動を楽しむ全国ネットワーク代表世話人

「楽しい、ワクワクする」がキーワードのようだ。楽しくなければ人は集らない。感情が無い人にワクワクするような事を提供する。一緒に創り出す。CSWや行政は住民の動きやすさ状況を創り出す。平成13年に始めたこのイベントが今も続いている、ワクワクする事が多かった。

福祉に携わってきて幸せで、今があの世のようで、今が冥福を過ごしている。幸せは奉仕する事。仕えあい、支え合うこと。地域には光も影もある。それを違う側面で考える。見守りは見張り。やる事とやられることは違う。自分達で作り合う福祉は楽しい。住民自治は住民福祉。自分達のまちづくりをしたいが、企業に寄りかかっている事もある。スーパーマーケットのKマートが地域から撤退して買い物難民がふえた事例もある。行政はお金「税金」を求めて自治権を放棄したともいえる。

現在はお金はないけれど物はある。空き家があまっている。有り余った資源がもっていない。よって、3RのほかにもうひとつRを加える。Respectである。例えば空き家を用いたり、空農地を用いたりして自分達の福祉は自分達で作られる。

50年もたてば地域は大変わりする。人は入れ替わる。好きな人からは離れる。誰も、受け入れなければならなくなる。

「一歩一会」一歩踏み出す事がつながりをもたらす。知らない人と出会い、同じような考えを持つ人にあえる。夢を見ると、小さな一歩を踏み出せばいろんな事がみえてくる。

あてがいぶちの福祉ではなく、住民がつくる手作り福祉を作っていこう。考え方を改めて、いろんなやり方で、いろんな事をしていこう。

全国と人とつながるサミットで、今日から変わる あなたと私。

2日間、このサミットに参加して、ほんわか優しい気持ちになれた。狭山市でも多くの人がいろんな事で福祉というか住民のニーズに応えようとしているのが分った。損も得も考えず、人や自分のために楽しく活動している。素晴らしいと思った。

問題は、皆さんが指摘していたように、このような枠に入らないで、つながりを持たないで、引きこもっている人々。このような人々とどう係わり合い、繋がって行くのかという事である。楽しくワクワクする福祉だけでなく、影の部分は必ずあって、そこに関わらざるを得ないのが福祉だ。同好会的なものには限界があると牧里さんは言う。CSWの仕事は、影の部分に日を当てて、暖かい居場所を作り上げる事に違いない。仕事として、市民と協働しての地域の福祉を活動として作り上げなければならない。大変だ。.....